

## 英語は主要部先行言語か

英語は、日本語のような主要部後続(head-final)言語との対照で、主要部先行(head-initial)言語と記述されることが多い。実際、決定詞句、前置詞句、形容詞句、動詞句、補文標識句では、主部が補部に先行する。

- (1) a. [DP a [N cat]]  
 b. [PP in [DP the mood]]  
 c. [AP fond [PP of chocolates]]  
 d. [VP eat [DP Brussels waffles]]  
 e. [CP that [IP she is happy]]

しかし、派生語と複合語では、右側主要部の規則(Williams 1981)として知られるように、主要部が右側に位置する。

- (2) a. [N [V examine] [N -ation]]  
 b. [N [A green] [N house]]

さらに、主要部を枝分かれしない範疇と定義して、接辞を主部と考えるなら、一般に語も語幹-接辞という主要部後続型を示すと言える。

- (3) a. [N [N Brussels waffle] [Af -s]]  
 b. [N [N Mary Arden] [Af -'s]]

すると、英語は主要部先行と主要部後続の両方の性質を持つことになる。

Haspelmath et al. (2005) 所収の Dryer によるデータで世界の言語を調査すると、語という小さな範疇から句・節という大きな範疇に拡大するにつれて主要部先行の語順が段階的に増えていくことがわかる。代表的な例を示す。

(4)	<u>Genera:</u>	<u>Jap/Kor</u>	<u>Uralic</u>	<u>German</u>	<u>English</u>	<u>Romance</u>	<u>Bantu</u>
a.	Root-Affix	+	+	+	+	+	+–
b.	Word (C)-Word (H)	+	+	+	+	–	–
c.	Modifier-Noun	+	+	+–	+–	–	–
d.	Object-Verb	+	+	+–	–	–	–
e.	Object-Adposition	+	+	–	–	–	–
f.	Clause-Subordinator	+	–	–	–	–	–
g.	Word stress	no stress	Initial	R-oriented	R-oriented	R-edge	penult

この表から、英語は、一貫した主要部先行型の Bantu 語族から、一貫した主要部後続型の日本語・韓国語に至る段階のほぼ中間に位置することがわかる。同じく Haspelmath et al. (2005) 所収の Goedemans and van der Hulst のデータを合わせると、(4g)のように、語強勢の位置がそれぞれの段階に従って語の左端から右端へ移っていくことがわかる。

発表題目の問いに対する答えとしては、英語は、語から複合語および名詞句のレベルまで主要部後続型で、前置詞句・動詞句以上の大きな構成素で主要部先行型ということになる。

では、なぜ英語は、名詞句を超えた点で主要部後続から先行へと切り替わるのだろうか。本発表では、補部の指定辞位置への移動による複合語化に対して、英語の右方指向(末尾第 1, 第 2, 第 3 音節)の語強勢が制約となって働き、名詞句を超える範疇での移動を阻止するためであると論じる。

この研究は、言語習得に関して、英語および諸言語の主要部パラメーターは統語範疇のすべてに同一でないこと、またその決定には語強勢が関与しているということを示す。

#### 参考文献

Haspelmath, M. et al. (eds.). 2005. *The world atlas of language structures*. Oxford University Press.

Williams, E. 1981. On the notions 'lexically related' and 'head of a word,' *Linguistic Inquiry* 12, 245-274.

(1,498 字 (スペースを含めない))